

色彩を作り出す材料と技術からわかること

情報資料研究系 助教

保存科学

島津美子

インド中西部、世界遺産リストに登録されているアジャンター仏教寺院遺跡を初めて訪れたのは2009年、石窟寺院内の壁画の調査が目的でした。周囲に大きな建物などなく、夜間には野生のトラが出ることもあると言われ、現実感のないまま遺跡に向かいました。石階段を上り、緩やかなスロープを少し歩くと、崖に穿たれた石窟群が視界に飛び込んできます（写真1）。このような場所に石窟寺院を作ったことにも驚きましたが、内部の見事な壁画と彫刻による装飾には目を見張るものがありました。壁画の製作年代は、石窟によって紀元前2世紀～紀元1世紀頃と5～6世紀頃といわれています。いったい当時の人々は、どうやって絵の具を準備し、どのような技法で絵を描いていたのでしょうか。

現在のような合成材料による絵の具が作られる以前、有色の岩石や土、植物から抽出した染料などを顔料に加工し、これに膠や亜麻仁油といった顔料を固着する物質を混ぜて絵の具としていました。これは産業革命を経てさまざまな色の絵の具が工業的に生産できるようになるまで続きます。

顔料の原料となる岩石の中には、美しい青色をしたラピスラズリのように現在でも宝飾品に使われるものもあります。まずはこれを砕いて粉末にしますが、顔料となるまで細かく砕くには、たいへんな労力が必要だったと思います。中世以降ですが、オランダでは、風車を利用して岩石を粉碎し顔料とし、亜麻の種子を圧搾して亜麻仁油を得ていました（写真2）。

さて、先に挙げたラピスラズリを産出する地域は、ユーラシア大陸では現在のアフガニスタンに限られていました。そのため、広くアジアやヨーロッパの各地域に流通し、古くから貴重な青色顔料（天然ウルトラマリンブルー）として用いられてきました。5世紀のアジャンターの壁画に使われた青色も、17世紀のオランダにおいて、フェルメールが描いた「真珠の耳飾りの少女」に使われた青色も、同じ地域で産出した岩石が原料なのです。

これまでのアジアの壁画や北ヨーロッパの油彩画の技法材料研究を通じて、絵画の描き手は、材料を選び、さまざまな技法により求める色表現を作り出してきたことがうかがえます。絵の具の材質から、当時の原料の入手経路、製造および加工技術などが明らかになれば、絵画が製作された時代や地域の文化や技術の水準を理解するための一助となると考えています。日本の彩色については、これから調査を始めますが、今までみてきたものといったいどのような共通点や相違点があるのか、とても興味深いところです。

（写真キャプション）

写真1 アジャンター石窟群遠景（部分）、写真2 顔料を製造している風車（中央左）